第 10 回オンライン勉強会　議事録

日時：2022/2/6（日）　20：00～22：00
場所：Zoom
参加者：講師　1 名、聴講者　15 名
内容：
① 末次優花氏による「ロードキルアンケート結果と現状のロードキル発生状況と対策について」の講演
1. アンケート結果
2. 現状のロードキル発生状況
3. 現状のロードキル対策
4. 質疑応答

②脱臼ヤマドリの救護事例

現地で居合わせた獣医師が応急処置をし、ざっくりと脱臼の整復、皮膚縫合、固定をされた状態で受け入れた。受け入れ翌日朝は立って歩いていたため、再手術を計画。ただ、ストレスをかけると痙攣をしたため要注意の状態であった。出血量も多かった。

翌日、放鳥's 獣医師にて再度靭帯縫合手術を行った。手術は成功したが、麻酔からの覚醒がやや遅かった感覚があり、その矢先にバタバタと暴れ死亡した。

鳥は仮骨形成すると、出血もしやすくなり手術が困難になる。また、靭帯が萎縮してしまうため繋ぎにくい。そのため早期に手術とした。再手術が早すぎたのか？

A 獣医師；体力維持を待つのは可能か？開放性脱臼で出血量が多いと安静にさせるしかない。全身麻酔に耐えられる体力がなかったのかもしれない。

B 獣医師；歩いたりできる状態であれば、再手術はもう少し待ってもよかったのかもしれない。
手術はできれば 1 回で済ませたい。1 週間後だと患部が癒着するので、再建となると正しい位置に戻すのにどのくらい精度が保てるかは不安ではある。（放鳥を前提としているため）
ひとまず開放性の外傷を塞ぎたい気持ちも分かる。感染症予防のための皮膚縫合は良い判断。ただ、体力面を考えると（再手術を）待ってもよかったのかもしれない。感染症対策としては創傷面の洗浄の徹底だろう。

放鳥‘s B；輸液にサリンヘス等の代用血漿・体外循環希釈剤を使用していたら状態が良い方向に変わっていた可能性はあるだろうか。輸血まではできなくとも多少効果があるようには思う。→使用してみる価値はあったかもしれない。

放鳥‘s A；ヤマドリに輸血を行うとしたらどうか。ヤマドリ同士であれば可能かと思う。
鳥への輸血は同種では 1 回目であれば可能。
異種間（キジ科）だとどうだろうか。（放鳥's にキジ科のハッカンがいるためドナーとなりえるか？）

放鳥‘s B；異種間は厳しいと思われる。人の輸血の歴史では 1600 年代に羊の血液を人に輸血していたが、運よく助かった者もいたが死亡者もおり以降輸血自体が禁止されるという歴史がある。同種間でもうまくいかない場合もあるので難しいだろう。

放鳥‘s B；クロスマッチ試験のような、採取した血液で実験してみるのも興味深いかもしれない。